ルソー・『ジュネーヴ草稿』における 「一般的社会」の概念について

山下俊一

文中 O. C. はプレイヤード版全集を、*Pol. Writ.* は、Vaughan, C. E., *Political Writings of J.-J. Rousseau*, London, 1915 を指す。

ルソーよりの引用については、『社会契約論』、『人間不平等起原論』、『エミール』は岩波文庫版を、『政治経済論』は『世界大思想全集』版（河出書房、1956年刊、根岸国孝訳）を参照し、訳文には適宜手を加えた。

(1)

『社会契約論』のいわゆる『ジュネーヴ草稿』には、よく知られているように、第一編第二章として、『人類の一般的社会⁽¹⁾について』という、決定稿には欠けているかなり長文の一章が含まれている。この章の標題は一度消されて書きなおされており、もとは、『人間の間には決して自然的には社会は存在しないこと』(“*Qu'il n'y a point naturellement de société entre les hommes*”) となっていたことが知られている⁽²⁾。この一章は、ヴォーンが明らかにしたように、ディドロが『百科全書』に執筆した一項“*Droit naturel*”に触発されて

(1) 「一般的社会」‘*société générale*’または「大きな社会」‘*la grande société*’は「特殊的社会」‘*société particulière*’または「部分的社会」, *société partielle*’に対して使われる概念で、多くの場合、実体的には人類社会を指している。『ジュネーヴ草稿』のすべての場合、『社会契約論』第四編第八章（桑原、前川訳 184 頁、O. C., tom. III, p. 464）『政治経済論』根岸訳 8 頁、O. C., tom. III, pp. 247—248, 『エミール』第一篇、今野訳第一巻 27 頁、O. C., tom. IV, p. 248 などの場合すべてそうである。しかし、これに対応する「一般意志」「特殊意志」の概念がそうであるように、相対的な概念としても現れる（『政治経済論』根岸訳 7 頁、O. C., tom. III, p. 246）。

(2) O. C., tom. III, p. 1410.

書かれたもので、ルソーは、その論評を通じて『社会契約論』への展望を試みており、決定稿には見出だされない一本の思索の糸を見せてくれる点で注目される。

ディドロは“Droit naturel”において、人間の特殊利害 *intérêt particulier* を自然的な情念と欲求の発現として一従って絶対的にぶつかり合うものとして（いわばホッブス流に）とらえ、その調停を人間の理性に、そしてその拠るべき規範を「人類の一般意志」⁽⁴⁾に求めた。ディドロの記述は歴史的なパースペクティヴでなされたものではなく、単に一般的・抽象的に、法と倫理的判断の拠るべきものを求めているにすぎないが、ルソーは、問題を「歴史的」な視野におきなおして考える。悪しき情念の発生自体問題であり、さらには政治社会と法の成立に先立って「人類」とその「一般意志」といったものがどのようなものとして存在しうるか、ということが問題なのである。ところで、法と秩序をもたらすものとして「人類」を考えるためには、何らかのわくぐみがなくてはなるまい。そのようなものとして浮かび上がってくるのが、いわゆる「自然的社会」である。

ルソーやホッブスを通じて社会契約の理論に接したのものには、「社会契約以前の社会」というのはひとつの自己矛盾のようにさえ見えるのであるが、ロックも含めて一般に自然法学派のひとつとは、共通して「自然的社会」‘*société naturelle*’ というものを考えていた。ロックが、「ひとつとの間における自然

(3) ルソーは、この章の中で、四ヶ所にもわたってディドロの文章をそっくりそのまま踏襲しており、また『政治経済論』においては“Droit naturel”を「この偉大にして輝かしい原理の源泉」とよび、自分の論文は「その敷衍」である、とさえ述べている（根岸訳6頁下、*O.C.*, tom. III, p. 245）。

(4) 「一般意志」‘*volonté générale*’の理論それ自体は、すでにホッブス、プーフェンドルフに見られるが、ルソーが“Droit naturel”と密接な関係をもつ二つの論文、すなわち『政治経済論』とこの『ジュネーヴ草稿』ではじめてそれに言及していることなどから見て、この理論のルソーにおける展開は、主として、ディドロよりの示唆によるものと考えられる。

(5) この『草稿』第二章の歴史的記述はまさに『不平等起原論』と『社会契約論』を結ぶものであり、一部のひとつとの主張するようにふたつの著作を「無関係」なものとして読むことの必然性は、これによって否定されるのである。

ルソー・『ジュネーヴ草稿』における「一般的社会」の概念について

状態を終結させるのはすべての契約でなく、ひとつの共同体 Community にはいつひとつの政治体 Body Politick を成すべくお互いに同意するというこの契約のみがそうなのである⁽⁶⁾と述べているように、自然状態においてもひとは社会的な関係を取り結びうるものであり、ビュラルマキのいうように、「この社会（政治社会）を単なる自然的社会 Société de Nature から区別する本質的な特徴は、（自然状態における）平等と独立にとってかわる、ひとつの主権 Autorité souveraine への従属ということ⁽⁷⁾」なのである。

抹消されたもとの標題によって、ルソーが当時一般化していたこの「自然的社会」の概念を一ディドロ批判を通じて一否定しようとしたことがしられる。しかし、それは単純に否定された訳ではない。かれはここで「自然的で一般的な社会」‘société naturelle et générale’⁽⁸⁾について語っており、かれが「自然的社会」に「一般的社会」という新しい名を与えて、ひとまず手許に留保したことは明らかである。しかしそれならば、標題の変更はこの点に関する何らかの立場の変更を暗示するのであろうか。この問題を考えるにあたって、とりあえず、「一般的社会」がどのようなものとして描かれているかを概観しよう。

ルソーによれば、欲求 besoin の増大によって人間がその本源的状態 état primitif を逸脱するや、限りない人間の転落がはじまる。「人間の力は、その自然的な欲求とその本源的な状態とに相応しており、すこしでもこの状態が変わり、その欲求が増大すると、仲間の助力が必要になる、そして、ついにその欲望が全自然を包含するに至るや、全人類が協同してもそれを充たすには充分でない、という事態になる。こうして、同じ原因によってわれわれは邪悪になり、そして奴隷となり、墮落させられることによって従属的存在と化するのである⁽⁹⁾」。それはまた、アナーキーと絶えざる流動の状態である。「ひとりの人間

(6) Laslett, P., *Lock's Two Treatises of Government*, 2nd Reprinted ed., Cambridge, 1970, chap. 2, § 14, pp. 294—295.

(7) *Principes du droit naturel*, Première Partie, chap. 4; Cf. Derathé R., *Jean-Jacques Rousseau et la science politique de son temps*, 2^e éd., 1970, p. 126.

(8) O. C., tom. III, p. 288.

(9) Ibid., pp. 281—282.

の自然状態における相対的な存在は、絶えず流動している幾千という諸関係に依存しているのであるから、かれの一生の間の二つの瞬間に同一の存在でいるようにすることは、かれにとってまったく不可能である。平和と幸福は、かれにとって一瞬の電光のごときのものである。このような激しい移り変わりから生ずる悲惨以外には、永続的なものはなにひとつない⁽¹⁰⁾。この同じページからの二つの引用によって、描かれている人間の悲惨が単なる歴史的過去の記述ではなく、現代社会における人間の疎外がそこに重ね合わされ・投影されていることがそこから読みとれるであろう。なぜなら、ルソーにとって、現代社会はひとつの新たな自然状態に他ならないからである。

ところで人間の情念と欲求は、ディドロのいうように必ずしも同じような反社会的な力なのではない。「われわれの情念がわれわれをお互いに引きはなすのと丁度同じだけ、われわれの欲求 *besoin* はわれわれをお互いに接近させる。そして仲間と敵対するようになればなるほど、われわれは仲間なしでいられなくなる。一般的社会の最初の結びつきとはこのようなものである。」「われわれ相互の必要 *besoin* から生まれる一般的社会は、悲惨な状態におちいった人間に対して何らの有効な援助も与えない。すでに力を十二分にもっているものに一層の力を与える他、何の新しい力も与えはしない。そして他方、すべてを失い、窒息し、群集の中で踏みつけにされた弱者は、身を寄せるかくれがもなく、弱さを支えてくれる何物もないまま、ついにはそこに幸福を期待して、この偽りの結合の犠牲となって果てるのである。⁽¹¹⁾」

上の引用文に続く抹消された部分にはこう書かれている—「ひとつとは自発的な結合 *des liens volontaires* というかたちで結び合うのだが、この結合の契機の中には真の結合に適した条件はまったく見出だされない。⁽¹²⁾」「こうして自然の指示に従ってなされるというこの社会契約と称するもの *ce prétendu traité social dicté par la nature* がまったくの幻想であることがわかる。

(10) O. C., tom. III, p. 282.

(11) Ioid., p. 282 (傍点山下)。

(12) Ioid., p. 283 (傍点山下)。

というも、このような契約の諸条件というものは、いつも、わかっていないか実現不可能であって、それは無視するか侵犯するかより他に仕方がないからである⁽¹³⁾」。

以上の文章からわかることは、ルソーがあくまでも、およそ「社会」なるものの成立は、したがって「一般的社会」の成立も、契約すなわち人為 art のわがざとしてしか生じえない、という主張を固持していること、またかれは「人類の一般的社会」における自然 nature と人為 art の一致には一抹の期待を寄せたとはいえ、それはまったくの幻想 *une véritable chimère* でしかありえなかったこと、などである。つまり、ルソーがかれ固有の「自然状態」の概念から（論理的に）引き出すことのできた「一般的社会」は、ディドロのそれと異って、ひとつの擬制的な社会・『不平等起原論』後半に示されたような末期的な自然状態の合理化以外のものではありえなかったのである。その結果、この「偽りの結合」行為の前と後には何ら本質的な状況の差異はない。実際ルソーの文章の中で、どこまでが「一般的社会」の成立に先行する状態の描写であり、どこからがその成立以後の状態であるのかは、ほとんど見分けることができない。このような区別は、かれの念頭にまるでなかったかのようである。というも、かれの関心はむしろ、“*Droit naturel*” でディドロの登場させた利己的利害の代表者 ‘*raisonneur violent*’ 自身の論理を敷衍し、そこからいかにすれば法と社会への道が見出だされるか、という点に集中していった、と思われるからである。

こうして「一般的社会」は、‘*raisonneur violent*’ または「人類の敵」の⁽¹⁴⁾ ばっこする場を呈供するひとつのセッティングといった外観を呈する。ルソーは、ここで人類のおかれて⁽¹⁵⁾ いる状態を「独立の状態」‘*l'état d'indépendance*’ とよび、その主人公を「開化した独立人」⁽¹⁶⁾ ‘*l'homme éclairé et indépendant*’

(13) *Ibid.*, p. 284(傍点山下)。

(14) 「自分の特殊利害 *volonté particulière* にしか耳を貸さないような人間は人類の敵 *L'ennemi du genre humain* である」(Diderot, “*Droit naturel*”, *Pol, Writ.*, vol. 1, p. 432)。

(15) *O.C.*, tom. III, 284.

(16) *Ibid.*, p. 284.

とよんでいる。それは(純粹な)自然状態から「完全な独立と無制限の自由」^{(16)a}を引き継ぎ、「自然状態の自由のもとに生きると同時に社会状態の諸要求 *besoins* のもとに生きている」人間である。この「独立人」に向かつてルソーはディドロのことはそっくりくりかえし、みずからの行為を人類の一般意志に一致せしめよ、と説く—「しかし哲学者はわたしを、他ならぬ人類の面前へと指し向けるであろう。全体の最大の善のみが人類のもつ唯一の情念であるのだから、この問題の決定権はただ人類にのみ属するのである。人類はわたしに語るであろう—自分が、自分は何の程度に人間であり、市民であり、臣民であり、父であり、子であればよいのか、また、自分が生き、そして死ぬるときとしてはいつがふさわしいのか、こういうことを質ねるべき相手は一般意志なのだ、と(以上はディドロの文章の逐語的な借用)⁽¹⁷⁾。しかしわれわれの独立人は云うであろう。『よくわかった。基準になる原則については同意する。しかし、何故わたしがこの原則に従わねばならないのか、ということがまだわからない。何が正義であるかをわたしが教わるかどうかということが問題なのではない。問題なのは、正義につくということがどのようにわたしの利益になるのか、ということなのだ』⁽¹⁸⁾」。

‘raisonneur violent’の最後のことはによってルソーは『社会契約論』全体の論理展開を用意し、同時にディドロの地平を完全に超える。何故なら、「正義と有用性」「権利が許すことと利害の命ずること」を結合しようとする⁽¹⁹⁾ことこそ、『社会契約論』におけるかれの中心的な努力であるのだから。ディドロは人性の悪 *méchanceté* を前提として出発しながら結局は、無媒介に、ア prioriに、「人類の一般意志」によびかけた。しかしルソーは云う—「われわれは悪そのものから、それからの救済の道を引き出すように努めねばならない。できることならば、何らかの新しい結合 *nouvelles associations* によって一

(16a) *O. C.*, tom. 111, p. 283.

(16b) *Ibid.*, p. 288.

(17) *Cf. Pol. Writ.*, vol. 1, p. 432.

(18) *O. C.*, tom. III, p. 286. (傍点山下)。

(19) 桑原・前川訳14頁, *Ibid.*, p. 351.

(20) *Pol. Writ.*, vol. 1, p. 430.

一般社会の欠陥を矯正しようではないか。……人為 *l'art* が自然 *la nature* に対して加えた悪をいかにして回復するかという方途を、完成された人為(技術)によってかれに示してやろう⁽²¹⁾。この人為による解決が社会契約を意味することとはもちろんである。

このようにルソーは、かれの「社会契約」をまったくの人為として呈示する⁽²²⁾ ことによって、コスモポリタンのヒューマニズムと完全に訣別したのである。

(3)

今一度はじめの問題に帰ろう。ルソーが、「自然的社会」の否定というかれの原則的立場を決して捨てなかったことは、すでに明らかである。『社会契約論』決定稿においても、政治社会は自然状態のただ中に、直接、生み出されるかに見える。ところで一方『不平等起原論』においては、かれは政治社会形成以前の社会について、はっきり語っている。論理的・歴史外的なフィクションである純粹な自然状態(孤立人の世界)と区別された歴史内のないわば第二の自然状態として、かれは「生まれたての社会」*'société naissante'* あるいは「はじまりの社会」*'société commencée'* に言及し、この「われわれに知られている大部分の未開民族が到達していた段階」を「世界の真の青年期」として讃えている⁽²³⁾。そればかりでなく、平行的な記述において、自然人が「家畜の群のような結合」や「一種の自由な協団体」*'quelque sorte d'association libre'* を経て⁽²⁴⁾、ついには「習俗 *moeurs* と性格 *caractères* とをひとしくする

(21) *O.C.*, tom. III, p. 288. (傍点山下)

(22) このことは、必ずしもルソーが自然法を否定したことを意味しない。しかし、かれがこのような立場に立つことによって、自然法からその積極的な働きを大幅に奪ったことは明らかであろう。ルソーにおける自然法の問題については、Cobban, A., *Rousseau and the modern State*, 2nd rev. ed., London, 1964, p. 169; Haymann, Fr., “La loi naturelle dans la philosophie politique de J.-J. Rousseau”, *Annales de la Société J.-J. Rousseau*, tom. XXX, 1943—45, pp. 66—67 参照。

(23) 本田・平岡訳 87—88 頁, *O.C.*, vol. 3, p. 170.

(24) 同上 82 頁, *Ibid.*, p. 166.

個々の民族 Nations を形成する⁽²⁵⁾」ことが、充分説得的に述べられているのである。したがって、国家構成論における原則的主張＝自然的社会の否定と、国家形成以前の社会の上記のような事実上の容認との間は、架橋されずに空白のまま残っている、という他はない。しかしながら、原則的主張をこのようにまで固持しようとするのは、一体何故なのだろうか。

容易に想像されることは、ルソーは、社会をあくまでも art として捉えることによって、その「創造主」である人民の手に一層多くの自由を確保しようとしたのであろう、ということである。しかし、問題はそれだけではないようである。

『ジュネーヴ草稿』やほぼ同時期に書かれた『政治経済論』には、契約の有无といった原則的な判断基準に訴えることなく、人類あるいは世界と国家との相異を、相対的なものに解消しようとするような記述がまま見出だされる—「何となればその場合、世界という大都市が政治体 *le corps politique* と考えられ、自然法は常にその一般意志であり、各国家・民族は、その個々の成員にすぎないからである⁽²⁶⁾」。ルソーはこの場合、「一般意志」を相対的な概念として捉え、個々の政治社会の一般意志を規制しうる上位のものとして「人類の一般意志」を指示し、その中に普遍的な規範＝自然法を求めたのである。このことは、ともすれば、政治体（国家）の一般意志が無制約のものであるかのような印象を与えて論議的になった『社会契約論』⁽²⁷⁾決定稿の叙述と比較して、注目されるころではある。しかし、このような論理がどうしても自己矛盾を含まざるをえないことも、また明らかなのである。

ディドロを通じてホッブス、プーフェンドルフから継承された「一般意志」の理論は、いわゆる「道徳的人格」‘*personnalité morale*’の理論と本来一体をなしていた⁽²⁸⁾。「道徳的」とは、「自然的」に対して *institution (impositio)* によ

(25) 同上 86 頁, *Ibid.*, p. 169.

(26) 『政治経済論』根岸訳 6 頁下, *O.C.*, tom. III, p. 245.

(27) Cf. Haymann, *op. cit.*, pp. 65—110.

(28) Derathé, *op. cit.*, Appendice 3, pp. 397—410.

ルソー・『ジュネーヴ草稿』における「一般的社会」の概念について
つてつくられるものを意味するのであるから、⁽²⁹⁾「人類」を、自然的に与えられたもの＝神による創造物とする限り、それに「道徳的」人格の属性である「一般意志」を認めることは背理である。すなわち、「一般意志」を「人類」に賦与するためには、人類をもひとつの art として＝「道徳的人格」として考える他はない—「もし、一般的社会が哲学者の体系以外のどこかに存在するとすれば、それは……それを構成する諸個人の性質から区別される、固有の性質をもった道徳的存在であろう」⁽³⁰⁾。そして、社会契約はこの「道徳的人格」を形成する契機なのであるから、ルソーは「一般的社会」の形成に際しても、あくまでも「自然の指示に従ってなされるというこの社会契約と称するもの」を想定せねばならなかったのである。（しかしまた、この場合は人類は自然的な神の創造物ではなくるのであるから、その一般意志の中に、直接、自然の声—自然法—をきくことは、より困難になるであろう。これは、ひとつの新たな難点というべきであろうか）。

(4)

上に見たように、ディドロからいったん引き継がれた「人類の一般意志」というアイディアには、どうしても無理が伴った。いうまでもなく、『社会契約論』決定稿で展開されるのは、「政治体」の一般意志の理論であって「人類」‘Genre humain’の一般意志の理論ではない。とはいえ、『草稿』第二章が決定稿からまったく除外されたことは、人類的視点そのものが捨て去られたことを意味しない。人類の問題性を「一般的社会」という枠組みで捉えることに無理があり、またそれが、『社会契約論』の論理とも整合的でなかったからである、と私は考える。政治社会の枠の中で問題を考えようとする『契約論』の構造は、その本質においてきわめてリアリスティックな解決だったのである。『草稿』の中でかれは述べている—「われわれは、一般的社会をわれわれの特殊的社会にならって描き出す。われわれに大きな社会を想像 songer à させる

⁽²⁹⁾ *Ibid.*, p. 399.

⁽³⁰⁾ *Ms. Genève* I. 1, ch. 2, O.C., tom. III, p. 284.

のは、諸々の小共和国の制度である。そしてわれわれが本当に人間 *hommes* になりはじめるのは市民 *citoyens* になった後のことなのである⁽³¹⁾。普遍的存在者としての人間を担うべきはずの「一般的社会」は、どうしてもこのような実体を欠いたものにとどまってしまう、そうルソーも感じざるをえない。それは結局外延的なひろがりの中には求められないのだ。ひとりひとりの人間が真に *homme* になること、それがはじめて「人類」に内容を充てんするのである。

しかし、上の引用文に暗示された二つの道＝「市民」への道と「人間」への道は、ルソーに解決しがたいアンチノミーを呈示する。ルソーの精神の内には二つの原像＝理想像がはらまれていた。ひとつは、少年時代から親しんできたプルタルコスなどによってつちかわれ、またジュネーヴ共和国の精神によって暗示されたものであり、それは「市民」への道を指し示す。もうひとつは、かれの実存の最奥にひそむもの・最終的には『孤独な散歩者の夢想』によって主体的表現を与えられ、『不平等起原論』と『エミール』において「自然人」のヴィジョンとして客体化された「人間」への道を指し示す。ふたつのヴィジョンは、いずれも社会的現実に対置された「真理の鏡」でありながら、それら相互の間には和解しがたい全構造的な相異があった—「自然人は自分がすべてである。かれは単位となる数であり、絶対的な整数であって、自分にたいして、あるいは自分と同等のものにたいして関係をもつだけである。社会人は分母によって価値が決まる分子にすぎない。その価値は社会という全体との関連において決まる。⁽³²⁾」かれは、「人間」と「市民」の両者を同時につくることはできない、と述べている。⁽³³⁾

このアンチノミーは、私の見る限り、ルソーによって理論的には解決されなかった。しかし『契約論』で「人類」への直接的な訴えかけをやめ、「一般的社会」の概念を放棄して、政治社会のレヴェルで問題を集約した際のかれの現実的な姿勢は、下記のようなことばに充分示されている、と私は思う。そして

(31) *O. C.*, tom. III, p. 287.

(32) 『エミール』第一編、今野訳、上巻27頁、*O. C.*, tom. IV, p. 249.

(33) 同上26—27頁、*Ibid.*, p. 248.

ルソー・『ジュネーブ草稿』における「一般的社会」の概念について

普遍的な人間の問題は、個人としての自然人＝エミールに内包されたものとして、政治理論とは別個に展開されたのである。—「あらゆる部分的社会は、その範囲が狭く、固く団結しているばあい、大きな社会から離れていく。愛国者はみな外国人にたいして苛酷である。……これはさげがたい不都合だが、たいしたことではない。かんじんなことは一緒に暮らしている人々にたいして親切にすることだ。……書物のなかで遠大な義務を説きながら、身のまわりにいる人にたいする義務を怠るような世界主義者を警戒するがいい。そういう哲学者⁽³⁴⁾は、ダットン人を愛して、隣人を愛する義務をまぬがれようとしているのだ」。

(筆者の住所：東京都小金井市前原町2—8—12)

(34) 『エミール』第一編、今野訳上巻27頁、O.C., tom. IV, pp. 248—249.